



ハチミツで健康づくり ～人のために想着て～

常光 信行

聞き手・金森 佳歩 松本 紗利奈 (石川県立鹿西高校2年)

家族のために

私は、昭和25年1月11日生まれで現在66歳の常光信行です。地元の小学校、中学校を卒業して、石川県立羽咋工業高校に進学、卒業しました。その後親の勧めで警察官になり40年間勤務しました。部署は7～8年間刑事をしていてそのあとは駐在所、交番所をまわっておりました。18歳から58歳まで40年間勤めてたんですよ。24歳の時に現在の妻と一緒に、長男、長女、次男がいて、それぞれが結婚して別々の場所に住んでいます。現在は妻と二人で気楽に生活しています。

私は色々なことをしていますが、大切なことは物事をしっかりと観察することだと思っています。特に何が基本になるか、どうすれば社会や家族のためになるか、基本的なことをふまえて自分で考えると良い考えが思いつきます。

また私の趣味は、切り絵、囲碁、陶芸、凧づくり、木工芸、

将棋、魚釣り等多くあります。私が趣味を行う時に心がけていることは自分でやってみるということです。そうすることで何が良くて何が悪いかが見えてきます。趣味が多いことで多くの人と会話が弾みます。またそれが私の人生の生きがいでもあります。

私は25歳くらいから、ミツバチの飼育をする養蜂を始めました。最初は職業としていたわけではなく、趣味として始めました。私が仕事を始めて7年目の時に仕事場の先輩がミツバチを趣味で飼育しているのを見て、すぐに自分もやってみたく思ったことがきっかけです。その先輩に養蜂を習いにいき、ミツバチを飼い始め、まずは3群(*1)のミツバチを飼育しました。採ったハチミツは家族や友人に食べていただき喜んでいただきました。しかし、最初の間は養蜂の知識不足でミツバチを死なせてしまうことも多く、退職前はしばらく養蜂を休んでいました。その後、定年退職後の第2の仕事としてもう一度養蜂を始めました。今年は春に10群のミツバチを購入して育てています。

(*1) 1群は15,000～20,000匹



(上) 1年間の主な作業
(右) 巣枠



四季に合わせて育てる

1年の作業は、春の3月に巣箱1段で5千匹のミツバチを大切に育てて、5月末に巣箱を2段にし、ミツバチの数も2万匹に増やしてハチミツの採取を始めます。この頃同時に果樹や果物などを栽培する農家の方に農作業の交配用にミツバチを貸し出しています。その農家の方から採れた物をいただくこともあり、それらはミツバチに感謝しながら食べています。5月末頃からは分蜂(*2)繁殖を避けるためにミツバチが逃げないように管理しながらハチミツを採ります。ミツバチの管理はとても微妙で、巣箱を観察しながらミツバチが分蜂の準備をしないようにミツバチの数を調節しないとイケません。具体的には、巣枠を入れ替えたりして卵を産む所を残す処置をします。卵を産む所が無くなるとハチが分かれていく準備をするんです。そうゆう分かれていく準備をしないようにハチの数をそこそこになるようにして、どんどん新しい枠を入れて調節しています。夏になると8月は暑さ対策、9月は冬季対策を考えながらハチミツを採ります。秋の10月から越冬の準備をします。越冬は巣箱の保温が基本です。一定の温度を保たないといけませんので、発泡スチロールを使ってハチの巣箱の保温対策をしています。しかしミツバチは寒さに弱く、冬には寒さによってハチが巣の中でたくさん死んでしまうことがあるんです。その時は、人間が人工的に死んだハチを外に出してあげないとイケません。自然界でミツバチが生活している時は死骸掃除係のハチがいるので、巣の中に死んだハチはいませんがね。1年の作

業はこのくらいです。

(*2) 巣箱内のハチの約半分が逃げ出し、他の場所で活動する事

ミツバチの意外な一面

ミツバチには、日本ミツバチと西洋ミツバチがいます。日本ミツバチは最近激減しています。その理由は、皆さんがスズメバチなどとミツバチを同じように考え、刺されるのが怖くて殺虫消毒をして殺してしまうからです。しかしミツバチは益虫であり、減少すると農作物に非常に影響があるんです。ミツバチが野菜や果物の交配を助けているから実がなるんです。そんな益虫のミツバチを皆さんにも大切にしてほしいですね。ミツバチの巣の前に立って刺激をしない限りほとんど刺すことはありません。そして、もし刺されたとしてもアレルギー体質の人以外は大げさな処置をしないといけません。ということはずです。

私は大事な餌を取り上げるので何度も刺されたことはありません。防護服を着ないでゆっくり作業すると作業効率が悪いので、私も防護服を着たり手袋したり、帽子がぶつたりします。そうすると時間的にも早く作業できるし、長時間の作業ができるんですよ。でも天気によっては防護服を着ないこともあります。

ミツバチの性質は、気圧の高い晴れの日にはほとんど刺されませんが、気圧が低い雨の日や曇りの日には刺します。だから私はミツバチの状態を見ながら防護服を着たり着なかったりするんです。でもハチミツをとる時に防護服を着て風が通らないようにしてしまうとダウン寸前になる事もあり大



(左) ハチミツを巣枠から採るための道具
(右) 防護服

変です。

日本ミツバチは少し環境が悪いと逃げていってしまう性質がありますが、私の飼育している西洋ミツバチは多少環境が悪くても巣箱に戻って自分の巣を守ります。

働き蜂がたくさんいるとたくさんハチミツが採れます。また、ハチの子供がたくさんいれば子育てのためにハチミツが必要になるので働き蜂は花のミツを採りに行きます。ミツバチの子育ての分私たちのハチミツが採れる量は少なくなります。そんなことも考慮しながらハチミツを採る量を調節しています。

ミツバチの天敵は、ダニ、スズメバチ、ツバメ、ガマカエル、トンボです。この中でもスズメバチの被害が一番多いです。西洋ミツバチは襲われそうになった時に防御しようとする防衛本能が強く、ミツバチの幼虫を狙う肉食のスズメバチに対して集団で巣箱を守ろうとしますが、ミツバチの体の3倍もの大きさのあるスズメバチが2匹以上襲来すると防御できません。巣箱の入り口にミツバチの死骸が山のようになります。だいたい3時間で1箱が殺されてしまうんです。スズメバチにも色々な種類があるんですけど、オオスズメバチが一番恐ろしいです。

スズメバチからミツバチを守るための対策も色々しています。巣箱の入り口に捕獲装置をつけたり、小屋にはネットをしたり、箱の上にネズミ捕り用の粘着板を仕掛けたりしてスズメバチを捕獲すると、スズメバチは仲間意識があるので、1匹かかると次から次ときて2~3日で10匹ほどかかります。他にも色々対策したんですが、ミツバチはスズメバチより小さくて弱いので殺されてしまうことが多いです。

あと、他の被害はミツバチの腐祖病(*3)等がありますね。

(*3) 細菌によってミツバチの幼虫が腐ってしまう病気

ミツバチの仕事の役割分担

ミツバチの中で一番大きいのは女王蜂です。女王蜂が大きい理由は、幼虫の間に栄養価の高いローヤルゼリーを食べて育つためです。しかも1つの巣に1匹しかいません。次に大きいのが雄蜂なんです。ハチの巣の雄はこの雄蜂だけで、仕事は女王蜂と一度だけ交配することです。雄蜂も数が少なく、数匹だけ生み出されるんですよ。その他のハチはみんな雌なんです。一番小さいのは働き蜂で、巣の中のほとんどがこの働き蜂です。仕事は花の蜜と花粉を集める事です。ですが働き蜂の生きられる期間は短く、働き次第で変わりますがだいたい冬季で4~5ヶ月、活動期には2~3ヶ月ほどしか生きられません。さらに採蜜期には短いもので1ヶ月で死んでいきます。なぜ冬の方が寿命が長いかというと、他の季節より働かないからなんです。いつもハチミツを採ると、ハチの餌が足りなくなるから、気候やミツバチの数を見ながらハチミツの採取の回数を決めてます。

寒さからミツバチを守る

自分なりに考えて工夫してみたことは、ミツバチの住み家である巣箱を一回り大きいサイズの箱の中に入れ、二重の構造にすることです。これを行うことで寒暖の差を少なくしました。もう一つは雨による気化熱を防ぐために、巣箱が濡れ



(上) 左：百花蜜 右：ヘアリーベッチのハチミツ
(下) 濡れないようシートを掛けた巣箱

ないように巣箱の上からシートを掛けていることです。ミツバチは寒さにとても弱いので、このような寒さから守るための対策はとても重要な仕事なんです。ミツバチの活動期の適温が35度くらいなので、細かく温度管理をしています。

美味しいハチミツ

ハチミツは、ミツバチが吸う花の種類によって美味しさが違います。私にとりハチミツの6割はヘアリーベッチという花のハチミツで、癖がなくて美味しい一級品のハチミツです。ヘアリーベッチとはマメ科の牧草で、花自体はカラスノエンドウによく似たツル性植物です。藤の花のような花が空に向かって次々に咲きます。開花期間は1~2か月の間くらいと長く、たくさんの同じ味のハチミツが採れます。他の花の開花時期はだいたい2週間前後の為、色々な花のミツが混ざりやすくなります。そのため色々な蜜の混じった百花蜜^{ひゃっかみつ}として販売しています。どちらのハチミツも美味しいです。240グラム入りのビンで百花蜜は1000円、ヘアリーベッチのハチミツは1500円の値段で直売しています。通常の市場

では2~3割ほど高くなります。ヘアリーベッチは百花蜜より手間ひまが多くかかり、色もきれいなので少しだけ高くなります。

美味しさの秘密

美味しいハチミツを採る秘訣は、やっぱり美味しい蜜の花を見つけることですね。石川県の他の養蜂農家さんは主にニセアカシアという花のハチミツを採っているようです。私は主にヘアリーベッチという花から採っています。ヘアリーベッチのハチミツを子供や孫が喜んで美味しいと言って食べてくれます。いくら美味しいハチミツでもたくさんあると飽きてしまい、まだあるから今はいらないと言われることもあります。しかしハチミツは意外と色んな食べ方があります。例えば、パンケーキにかけたり、トーストにぬったり、ヨーグルトに混ぜたりするととても美味しく食べられます。また、料理に入れてテリをだしたり煮物に使ったりします。ハチミツは健康に良いのでたくさんの人に食べていただきたいです。

他にもたくさんの事を

私は梅農家でもあります。仕事を辞めてから、中能登町から、旧鳥屋町が管理していた梅公園の梅の木220本の管理を委託されて梅を作っています。自然栽培で農薬は使用しません。消毒をしなくても病気にはなりません。主な作業は地面の雑草刈りと枝を切る剪定くらいです。雑草刈りは粉碎型の草刈り機を使用しており、刈った雑草をそのまま放置しておく自然の肥料になります。他にもギンナンの木、イチジクの木、ロウバイの木、ウド、クリ、ブドウ等を育てています。

私が育てている梅の木は石川一号と藤五郎という品種です。石川一号は石川県で梅干し用に開発された品種で、品質の良さでは南高梅と匹敵する品種なんです。藤五郎は梅酒用に一般的にどこの県でも育てられている梅です。梅は基本的に酸っぱい物なんです。梅の良さを見分けるポイントは、梅の粒の大きさや果肉の柔らかさ等です。

実のなる木は育てるのに時間がかかりますが、10年がかりでできる物はその後あまり手入れをしなくていいんです。主な作業は肥料と収穫だけです。高齢化する自分が健康で体力のある間に木を育て、体力の無くなった時には軽い作業だけになれば良いと思っています。

健康のため、人のため

何でも一緒ですが、楽しく人生を過ごすことが大切だと思います。社会には、自分の事ばかりを考えて物事をしている

人と、社会のために物事をしている人の2通り存在します。私は自分の健康と社会の人に喜んでもらえる農作業を思いながら暮らしています。皆さんもなんでも興味を持って挑戦すれば利潤なんて求めなくてもなんでもできるものです。

ここは田舎で、人口が減少して畑や田んぼが荒廃してきて地価が無料同然になっていますが、いずれは田舎の農家が繁栄する時がくるかもしれません。私は退職後の人生を荒廃している田畑を守りながら楽しく生きていきたいと思っています。田舎の農家の一人として明日を信じて頑張っています。黄金の金を持っていてもごはんは食べられないんです。食べられなかったら生きられないんです。どんな物でも良いので育ててそれを食べれば、生きられると思います。それがハチミツみたいに健康に良いものだったらなおさらいいですよ。私は私たちに健康を与えてくれるハチミツを作ってくれるミツバチに感謝しています。ミツバチさんありがとう。

[取材日：平成 28 年 8 月 2 日・ 8 月 26 日]

PROFILE

常光 信行 じょうこう のぶゆき

昭和 25 年 1 月 11 日・67 歳
養蜂業

58 歳の時、40 年間務めた警察官の仕事を辞め 25 歳のころから趣味として行っていた養蜂業を本格的に始める。養蜂業を行うかたわら、たくさんの趣味をもっており、陶芸では石川県民陶芸展の実行委員会を務めた経験もある。さらに一人で 220 本もの梅の木を管理している。



● 取材を終えての感想 ●



今回の「聞き書き」の活動に参加して、たくさん学んだことがあります。一つ目は、人生の先輩方の話を聞くことの大切さです。私たちが取材させていただいた常光さんは人のために何かしたいという気持ちをとっても強くもっていらっしゃいました。私も人のために頑張れる人になりたいと思いました。二つ目は、取材、まとめの大変さです。4、5 ページほどしかないページ数でもたくさんの時間をかけて取材、まとめをしました。ほとんど初めての経験で本当に大変でしたが、その分やりがい大きいです。三つめは、「聞き書き」のような活動を長く続けていくことが能登には大切ということです。私たちのまとめた作品集を読んで「能登にはこんな仕事をしている人がいるんだ」ということを知ってほしいです。

(金森 佳歩 写真：右)

常光さんはとてもフレンドリーな方だったのでとても楽しい雰囲気取材をすることができました。この聞き書き体験を終えて、聞いたことを書き起こし、まとめていく作業が大変だと思いました。どうやったら読み手に伝わるかなど考えながらまとめていきました。私は蜂と聞いて怖い、痛いといったマイナスなイメージしか持っていなかったけど、この聞き書き体験でミツバチの生態や、ミツバチは自然界に欠かせない存在であることが分かりました。蜂に対して良くないイメージを持っている人も多くいると思います。でも私たちのレポートを見て、蜂に対する偏見が少しでも無くなればいいと思います。この聞き書き体験は私にとってとても貴重な経験になりました。この経験をこれからの学校生活に生かしていけたらいいなと思います。

(松本 紗利奈 写真：左)